



地域の現況・課題

始良市は、鹿児島県のほぼ中心に位置する。市の南側には思川が流れ、その河口の前浜に、重富海岸と呼ばれる干潟が広がる。

この干潟は、数少ない県内の潮干狩り場となっており、かつては数万人の県民で賑わった。また、重富海岸を含む錦江湾沿岸部の浅場には、船にアマモが絡むほど広く繁茂していた。

しかし、干潟のアサリ資源は、過去の豪雨災害やナルトビエイ等の食害により著しく減少した。また、アマモ場の分布域も縮小し、ごく少量のアマモ群落が点在するのみとなった。

干潟や藻場は、水産有用種を含む多種多様な生物を育む場である。また、水質浄化や二酸化炭素の吸収など、市民にとっても有益な資源となっており、これら海域環境の再生が地域課題となっている。



連携の経緯

上記課題の中、地区の漁業者やNPO、地域住民で構成した「あいら藻場・干潟再生協議会」を平成22年度に設立し、アマモ場の再生やアサリ資源の回復に向けた取組をスタートした。

そのうち、アマモ場の再生活動については、漁業者が主体となり播種や移植による取組を試行錯誤しながら長年実施してきたことで、1haに満たなかった藻場が令和元年度に2haまで拡大し、更なる分布の拡大が期待された。

しかし、平成3年度にアマモ場が大きく消失した。その要因の一つとして、この年の冬季に沿岸部を襲った台風並みの風浪が挙げられたが、それを裏付けるデータが得られず課題となった。

アマモ場の再生活動を行うにあたっては、衰退要因の特定、またその対策を検討することが極めて重要であり、その体制づくりが当会において求められた。



高校生との連携体制づくり

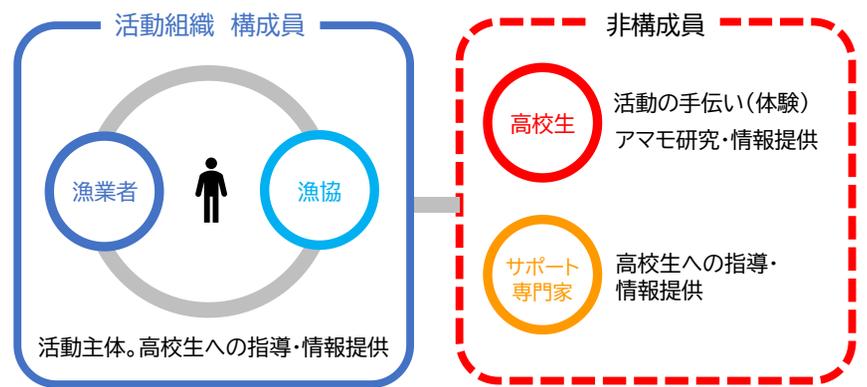
当会の体制づくりについて、他地域で連携体制づくりを進めていたサポート専門家に相談したところ、当地区のアマモ場再生活動と一緒に実施し、且つ研究・技術的能力を有す企業との連携が挙げられた。ただし、候補となる企業が少なく、ハードルが高いことから、まずは課題研究に取り組むような近隣の高校や大学などとの連携を模索した方が良いとアドバイスを受けた。

そこで、当地区の近隣にSSH（生徒が自主的に科学的な課題研究に取り組む高校）に指定された高校があることから、その生徒との連携を進

めることにした。

体制づくりにあたっては、まず学校の教頭にアポを取り、自分たちのアマモの取組等についてプレゼンを行い、連携の了承を得ることにした。また、自分たちの取組に参加してくれるよう、自主研究を始める1年生の生徒に向け再びプレゼンを行い、連携してくれる生徒を募集した。その結果、10名の生徒が興味を持ってくれ、高校にアマモ班が誕生し、一緒に活動を展開することになった。

● アマモ場再生活動に係る連携体制および各主体の役割



高校生との連携による取組

高校生との連携は、昨年度の秋に開始したことから、まずは、当会で春季に採取したアマモの花枝から得られた種子を用いた紙粘土法による播種と、一斗缶を用いた漁港内でのアマモの苗づくりの取組に参加してもらった。また、アマモ班の生徒が2年生になった春季には、花枝採取の体験をしてもらったり、専門家を招いて勉強会を開催した。

加えて、これら体験時や意見交換会などにおいて、取り組んでいる活動の経過や生徒たちの自主研究についての情報共有を図った。



連携の効果と今後の方針

高校生との連携にあたって、最初はアマモを知らない生徒ばかりで興味を持ってくれるか心配であった。しかし、体験等を通じて構成員と交流を深め、自分たちで研究テーマを見つけ、試行錯誤しながらその目標に向けた試験を行ってくれるようになった。また、こうした行為が、構成員の新たな気づきになったり、活動への意欲をもたらししてくれた。

今後、アマモ班の生徒は2年生終了時に引退することになる。そこで、新入生と新たに連携を組み、体制を維持しながら、活動の輪を広げていきたい。

鹿児島県立国分高等学校 理科科アマモ班

アマモの発芽条件を調べ、アマモ場に適した場所を探す

発芽実験(今年度)

〈目的〉アマモ場を再生するために、新たにアマモ場が作成可能な場所を探す。

〈内容〉アマモの発芽条件を調べる。

- ・発芽に塩分濃度が関係するの(0.0%、1.0%、2.0%、3.0%の3段階で実験)

〈結果〉観察中

〈昨年度からの変更点〉

- ・入れる海水の量を増やすために容器の大きさを大きくした。
- ・容器の大きくなったことにより、18パターンの実験をできるだけの海水や場所を確保することが難しくなったため、塩分濃度の実験(3段階)だけを行っている。